

Preface

はじめに

あなたは、文章を楽しんでいますか？

私は、とつても、楽しんでいます！

文章には、みつとも楽しみ方があるからです。

ひとつは、

「なにが書かれているか」

物語とか、テーマとか、情報そのものを味わう楽しみ。

ふたつめは、

「誰の目で描かれているか」

語り手の癖とか、世界の切り取り方といった視点の楽しみ。

そしてみつつめが、

「どんなふうに書かれてるか」

言葉のリズム、語り口、ちょっとした間の取り方……。

そういった“文体”的”楽しみです。

文体って、ほんと不思議。

特別な事件があるわけでもない。

目新しい情報があるわけでもない。

刺激的な話題で釣っているわけでもない。

でも、

なんだか先へ先へと読まされる。
気がつくと最後まで読んでいて、

しかも

「もう一回読もうかな」

なんて思ってしまう。

あれはきっと、書き手が“わかつてゐる”んです。

自分の文体を。

じゃあ、その「文体」って一体なんなのだろう？

……ということで、この本ではその謎に迫っていきます。

文体の世界には、

自分の思いや発見を

「届きやすくするヒント」

がたくさんあります。

それを知れば知るほど、

読むことも、

書くことも、

今よりずっと楽しくなるはず。

読めば読むほど、もつと読みたくなつてくる。
書けば書くほど、もつと書きたくなつてくる。

そんな禁断の世界に、あなたを^ご案内します。

はじめに。

突然ですが、最近、心に残っている文章ってありますか？

ニュースサイトやネット記事、SNSの投稿やコメント、友達のLINE、仕事のメール、動画のコメント欄、通販サイトのレビュー、ブログや個人のエッセイ……私たちは毎日、ありとあらゆる文章を目にしています。

今、私たちは人類史上かつてないボリュームの言葉を、無意識のうちに受け止めているのです。

ですが——ぶっちゃけ、ほとんど内容を覚えていない。内容どころか、読んだことすら記憶から消えている。

きっとあなたも、ときどきそんなふうに感じたことはあるでしょう。

私は「いつも」です。

申し遅れましたが、私は文芸評論家の三宅香帆と申します。

……と名乗つておきながら、読んだ本の内容を忘れたり、飛ばし読みで記憶があやふやになつたりすることもしょっちゅう。「あれ、どこまで読んだっけ?」と焦つてページを戻す、なんてこともあります。

ところがあるとき、気がついたんです。

この世には、スマホでぼんやり読んでいても、ふと目に留まり、頭の中に入り込み、心をさんざん揺さぶった挙げ句、記憶に居座り続ける——そんな言葉が存在するということに。

私が好きな作家の文章にも、そういう言葉があります。

歌の歌詞にもあるし、バズつてある言葉や、キヤッチコピー、短歌の中にもあります。こんなにも情報があふれる時代であつても、そうした言葉はちゃんと目立つ。

絵もない音もない、ただの「言葉」なのに。

それでも私たちは無視することができない——本当にすごい技術だな、と思います。

なぜ彼らの言葉は埋もれないのでしょうか。なぜ彼らの言葉は私たちを虜にするので

しょうか。

その答えは「文体にある！」と、ここで断言させてください。

思い返せば、普通の人が文章を習うのって、学校の作文の授業か、せいぜい文章術の本くらいだと思うんです。

つまり、私たちは「正しく書く」「わかりやすく書く」「失礼じゃない言い回しで書く」ことは教わつてきました。

しかし、今や「正しくて、わかりやすくて、失礼のない文章」はAIが、推敲もせずに一発で書いてくれるようになりました。

いやもう、AIの文章技術の進化がこんなに早いとは。ここまでくると、人間が文章をどうこうしようなんて、もう努力のしようがないのかも。

私にも、そんなふうに思つてしまつた時期があります。

ですが、「AIが正しい日本語を書けるようになつた」結果、どうでしょう。

ウェブ上にはAIの書いた正確で丁寧な文章があふれ、私たちの前を大量に通り過ぎていくようになりました。

そしてそういった「正確で丁寧な文章」は、なんとなく「読み飛ばしていい文章」と認識されるようになりつつあります。

もちろん、たとえば仕事でとりあえず送るメールとか、丁寧さだけ伝わればいいお礼文、失礼がなければそれでいい案内文みたいなものは、A Iに書いてもらつていいでしょう。しかし、ですよ。

読み飛ばされたくない、目に留まつてほしい、相手の心をつかむような文章は、やつぱり「人間が自分の手で書くしかない！」と私は強く思うのです。

なぜなら、なんとなく目に留まつてしまふ素敵な文章、感じの良さが伝わるようないい文章、読後に余韻が残る文章——そんな言葉を生み出すには、どうしても「文体」というものが必要だからです。

ではその「文体」とは一体なんでしょうか？

文体とは、その人やその作品特有の書き方のことである。
……こう定義されても、腑に落ちない人は多いはず。

というわけで、本書では、文芸オタクの私が、この謎めいた「文体」というものを勝手に分析し、存分に語り尽くしていきたいと思います。

同じ出来事、同じ思い、同じ発見をつづったとしても、文体が変われば、伝わり方はまつたく変わります。

文体こそが、まさに書き手の味。

絵でいえば“タッチ”、音楽でいえば“歌い方”的なものの。

それが一体どのように作られているのか、その細部に迫りながら、私と一緒に、文体の謎を解き明かしていきましょう。

そして私たちの想いがあふれた文章を、「みんなが放つておけない文章」へと育てていきましょう！

Table of Contents

目次

Contents

Chapter

1

惹きつける文体

しいたけの誘引力

最初に意味不明な言葉を放り込む。

良心的
釣りモデル

未解決疑問
モデル

星野源の未熟力
問い合わせを共有する。

質問一般化
モデル

佐々木俊尚の身近力
徐々に話の花を開かせる。

嵐の前
モデル

村田喜代子の展開力
日常から非日常に展開させる。

時制変更
モデル

森鷗外の寄添力
最初にしつこく「これは記憶」と伝える。

対にして
みるモデル

北原白秋の配合力
ふたつのものを並べて始める。

049

043

039

034

029

024

023

Chapter

2

先を読みたくなる文体

炎上回避
モデル

山崎ナオコーラの冒険力
あらかじめ自分を当時者から外す。

過剰口語
モデル

三浦しをんの台詞力
口語をより口語らしくする。

名詞止め
モデル

綿矢りさの簡潔力
語尾をぶつた切る。

会話割り
込みモデル

林真理子の強調力
カギカッコの中でお芝居をする。

曖昧共感
モデル

かつぴーの弱気力
曖昧さを残す。

5音9音ぶつ
切りモデル

村上春樹の音感力
読みたくなるリズムを使う。

083

078

072

067

060

059

053

Contents

向田邦子の柔和力 ひらがなで印象を変える。 仮名8割 モデル	090
井上都の冷静力 感情を見せない。 硬質筆致 モデル	097
恩田陸の快速力 つなぎ言葉を隠す。 接続詞省略 モデル	102
橋本治の豹変力 突然、口語になる。 壁ドン モデル	108
上橋菜穂子の親身力 読点でテンポを操る。 人柄調節 モデル	113
永麻理の代弁力 身近な人のエピソードを使う。 フィルター モデル	119
開高健の実直力 思いを、不器用に、全部並べる。 ゆっくり 語りモデル	123

Chapter

3

説得力を生む文体

江戸小嘶の小粋力 あえて、みなまで言わない。	158	秋元康の裏切力 オチでひっくりかえす。	150	紫原明子の息継力 段落で、呼吸を整える。	149	谷崎潤一郎の気分力 「どう感じているか」をくつづける。	143	三島由紀夫の対比力 でこぼこする言葉を使う。	132	司馬遼太郎の撮影力 カメラだけで書く。	127
---------------------------	-----	------------------------	-----	-------------------------	-----	--------------------------------	-----	---------------------------	-----	------------------------	-----

結末省略
モデル

妄想上昇
モデル

ヨガ文
モデル

主観バリバリ
モデル

対照的造語
モデル

映像記録
モデル

Contents

高田明の視点力 「あるある」から話し始める。 モデル	162
さくらももこの配慮力 真相を先に書いてしまう。	167
こんまり [®] の豪語力 アンチに対するフォローを入れておく。	174
齋藤孝の更新力 言いたいことを、言い換える。	179
上野千鶴子の一貫力 言いたいことのセンターを決める。	184
塩谷舞の先読力 今までの考えを、自分でくつがえす。	189
有川ひろの共感力 「百人中百人の同意見」を挿む。 モデル	196
感情一般化 モデル	

長調短調
モデル

藤崎彩織の旋律力
心の流れをスイッチする。

擬人化代弁
モデル

武田砂鉄の鍊金力
向こうサイドに感情移入する。

重ね合わせ
モデル

山極寿一の置換力
特殊な経験を、一般的な経験とだぶらせる。

永世中立
モデル

岸政彦の中立力
綺麗事と現実を、交互に出す。

段階的説明
モデル

日本人の悲哀力
理想から現実に引き戻す。
徐々に連想させる。

サンドイッチ
モデル

堺雅人のスライド力
根拠の前後を、言いたいことで挟む。

Contents

Chapter

4

記憶に残る文体

片仮名強調
モデル

俵万智の合図力
カタカナで注目させる。

共通言語
投入モデル

松井玲奈の国民力
万人に通用する例を出す。

意味拡大
モデル

J・K・ローリングの超訳力
「引用言葉」を拡大解釈する。

虚構現実
往復モデル

阿川佐和子の声掛け力
突然、読み手に話しかける。

過剰造語
モデル

宮藤官九郎の激化力
盛りまくる。

一文はずし
モデル

吉本ばななの意味深力
ふと、話をすらす。

271

265

259

253

248

242

241

**二人称語り
かけモデル**

山田ズニーの一対一力
当事者意識を持たせる。

**余韻増幅
モデル**

岡本かの子の言い残し力
最後の一文を、情景描写で締める。

**違和感
モデル**

ナンシー関の警告力
評価と感情を分ける。

**白い肌雪の肌
モデル**

ビジネス書の隠喻力
大人語を「子ども」の気持ちで言い換える。

**緊張と緩和
モデル**

又吉直樹のかぶせ力
「真面目」と「脱力」を組み合わせる。

**言葉遊び
モデル**

清少納言の音合わせ力
似た音でそろえる。

**重ね合わせ
モデル**

加藤シゲアキの回想力
出来事に代弁させる。

Chapter

1

惹きつける
文体

良心的
釣り
モデル

しいたけの
誘引力

最初に意味不明な言葉を放り込む。

え？ 今なんか変なこと言わなかつた？

垂らされた釣り糸には、うつかり、ひつかかっちゃうもの。

映画でもドラマでも漫画でも、しょっぱなに「これはどういう意味……？」って気になる場面があると、ついついそのまま見続けてしまいます。ほら、いきなり手がハサミのキャラクターがいるとか、突然丸くて青いロボットがひきだしから現れるとかすると、「どういうこつちやねん？」と目が離せなくなる。

これ、文章でも一緒だと思うんです。最初になにか“ひつかかり”があると、どうしても続きを読むたくなるんですね！

ここでお手本にしたい文章は、大人気の占い師・しいたけさんとのある日のブログ。年齢も素性も顔も不明なしいたけさんですが、どっこい、しいたけさんのブログを読むと「なんか親しみやすくて、信頼できる人だなあ……」となぜか心を許してしまいます。

これって、すごいことじゃないですか？

勝手な持論を展開いたしますが、そもそも「占い」の解説って、ものすごく高い文章力が必要だと思うんです。だって占いって、そもそも……ちょっと怪しいじゃないですか。生まれた日によつて私たちの運命が決まつてるなんて、そんな勝手に私の人生決められたまるかよ、と反発する人もいるはず（私はわりと信じちゃうんですけど）。

でも、ならばなぜ主に女性向けメディアで「今月のあなたの運勢☆」が定番コーナーになつてるかつていえ、それはひとえに「占い師の文章がめちゃくちやうまいから」だと思うのです……。

〈あなたは今こういう状況でしょう〉と語りかけられると、全国に存在する何万何十万という読み手が「あ、これ私に向けて書かれてる言葉かも……？」と感じてしまう。（当たるわけないでしょ）と顔をしかめていた人も、（もしかしたら当たつてるかも……）とつい考えをあらためてしまう。そんな魅惑的な文章を書けるのが占い師の匠の技。特に人気占い師のコラムなんて、超一流の文章であることは間違ひありません！

そんな占い師しいたけ、さんの単なる日常ブログにも、その文章力は遺憾なく發揮されております。

お盆休みに広島県の福山の神石高原（じんせきこうげん）ホテルというところで名越康文先生の合宿に参加してきました。

すごく実り大きな2泊3日になって、改めて、なんで「合宿」というものに参加しようと思ったかと言うと、合宿ってポロリが多いんですよね。

ちゃんと説明

カタカナにするとことで「ひつかり」→「なに?」と思わせろ！

ポロリとは何かについて説明したいんですけど、合宿を主催した名越先生って著名人だし、そういう著名人とか教壇の前に立つ方って、想像以上に自分の言動に気を付けているのです。

具体的「ポロリ」の説明！

でも、合宿中とかって「これは教科書とかには載せられないし、大きな声で話したら誤解をされるかも知れないから言えないけど」っていう、ポロリが多い。僕は勝手に、その「ポロリ」がその人の本筋に根差した、知恵の結晶だと想っているのです。

まじめ やかりやすい、
ついていくやすい。すごい

「じいたけ」「じいたけ」のブログより

この文章の最大のポイントはどこでしよう。つい目を奪われる箇所はどこかということ。
 そうです、『ポロリ』です。『いたけ』さんは、とある先生の合宿に参加してきました、
 と切り出し、そのまま合宿における出来事を話すのかと思いつかや、突然登場させる言葉が
 『ポロリ』。（え、なんのこと!?）と読者はドキッとする。だつて「合宿でのポロリ」って
 ……なんかこう、妙に生々しい感じがしません!? 気になる。

そこでしめたけ・さんは、きちんと「ポロリとは何かについて説明したいんですけど、」
 「……聞こえますか……今、ポロリという言葉が気になつたそこのあなた、安心してください
 さい。ちゃんと今から説明しますから」というふうに、まるで読み手の心を見透かしたよ
 うに、すぐさまフォローしてくれます。（なんのこと!?）と最初に戸惑わせておいて、「ちや
 んと説明しますね」ってにこつと笑いかける。読者が『ポロリ』でひつかることをきち
 んと予測しているわけです。「読み手がひつかかる」→「書き手がそのひつかかりを取る」
 このくり返しそが、占いという、相手が特定できないようなメッセージを、読み手全員
 に「私に向かつて語りかけてくれる……?」と思わせる文章に仕立てあげるのでしよう。
 こんなふうに、先にあえて『刺激的かつ意味不明な言葉』を放り込み、あとから「実は
 こういうこと」とやさしく説明していく。この流れこそ読み手をするつと巻き込むお手本
 のような文体です。

心を先読みされると、無視できなくなる。

まとめみた

- 1、伝えたいことを一文にしてみる。
合宿では、偉い人が、普段話せないような重要なことを打ち明けがち。
- 2、その中で、一番伝えたい部分を伏せ字にする。
合宿では、偉い人が、「ピ一」としがち。
- 3、その伏せ字を、いろいろ言い換える。
合宿では、偉い人が、口を滑らせがち・リークしがち・ぶっちゃけがち……など。
- 4、一番インパクトのある言葉をチョイス。
合宿では、偉い人が、ボロリしがち。